家庭に於ける趣味の涵養

川口孫治郎

第一節　家庭の人々

其一、家長と主婦

如何なる場合に際しても、我家族の社會に於ける幸福と繁榮との如何は盡く己一身の責任なりとして泰然と引受け居る家長の恩威の自づから現るゝやうにあること、特に如何なる場合に際しても、我家族の家庭に於ける平和と幸福との如何は寄せて全く己一身の責任たりと優然と引受け居る主婦の慈愛の自づから溢るゝやうにあること、約言すれば、權威備れる犧牲的精神と慈悲深き犧牲的精神との二者が、殆んど宗教的に具足すること、之が家庭に於ける趣味涵養の自づからに行はるべき根本的要件である。

歩を進めていへば、若し主婦にして具足せざるところありとも、家長に於て之を導いて以て右の要件に合するやう、わざとならず心懸くること、及び之と反對に若し家長に不十分なるところありとも、主婦に於て之を助けて以て右の要件に合するやう、かたくなならず心懸くること、が根本要件中の更に要部である。就中、後者即ち主婦の徹底せる犧牲的精神が、眼目中の眼である。

萬一右の最後の斷言に對して、片手落の主張なりと思ふやうな心懸けの主婦であつては、場合の如何に關せず、未だしい人であらう。但し斯樣な主婦を薫陶するところに趣味があるでもあらうが、さういふ工合では勢家庭の各員等の趣味涵養が後廻はしにならねばならぬ嫌がある。況してさういふ主婦などが、世に流行せる趣味の涵養を云々したとて、迚も健全な望ましい趣味の涵養は出來さうにも思へない。何事も根本が大切である。

此根本が確立すれば、假令社會は如何に錯雜せる活劇場となるとも、家庭内はとこしへに、暦日だになかりさうな桃源郷であるであらうと思へる。

其二、家庭の各員、

家庭には、家長主婦の外に、親もあり子もあり兄弟もあり姉妹もあることもあらう。我邦では斯か

る現象は敢て珍らしいことはない。社會の上流と自から許せる家庭には往々不自然極まる乾燥冷索なものゝあるを茲には除外例として一般に上中下流に通じて健全なる家庭らしい家庭には自然に人數が少くない。

斯く多人數の家庭にて、全く平穏無事和氣靄々の中に生活する例も少くない。所謂無爲にして化するものがないではないが、人情の常としてよい上によいやうにと望蜀の慾から何かと自から好んで事情を起しもする。又好んで起さなくとも動もすれば起るのが常態である。家庭の各員が盡くさうと悟つてしまへば別段何ともないであらうが、悟つたつもりでも心得たつもりでも尙ほいろ〳〵事情が起る、それが人生の趣味あるところであらう。

實際、少壯な者から、年寄のする事を見れば、十に一つや二つは、琴柱に膠するやうなこと、石橋を敲いて渡るやうなこともないとはいはぬ。斯かる場合でもそれが往々少壯者が經驗に乏しき爲に夫程までに丁寧にしなければならぬことを知らぬ爲の誤解であることが少くない。されば少壯者が常に年寄に對しては心地よげに從順にすることは、聰明な心懸であり至當のことであり人の道である。それが出來ぬは、年若き者の生意氣である、我儘である、社會は個人の我儘を參酌なしに嚴罰に處するけれども、家庭内では大抵見逃がして貰つて居る。それに增長して益我儘の募るやうでは、家族に對して相濟まぬのみか、後日社會の一員たるべき自身の資格を自身で破壞しつゝある一種の自殺的行爲である。愼むべきは我儘である。之を取除く心得は自他の趣味涵養上第一の心得たることを念としなければならぬ。

次に、年寄の方から、年若い者のする事を見れば、十に六七も雲に架け橋カスミに千鳥所謂泰山を挾んで北海を越えんとする類で不安心の點も多からうと思ふ。之が爲に年寄が自己の經驗から少壯者への親切から時には若者には小言をいふのである。けれども又一体に人間といふものは自分の昔を忘れて現在の自分で人を律して云々する傾向を持つて居るものである。誰でも一度は小兒であ

つたにも拘らず、中年の者が小兒に對して頓馬な推測をしたり、老年の人が少壯者に對して取越し苦勞をしたりすることが往々ある。夫故に年寄が親切から少壯者に教訓戒飾を加ふることは誠に少壯者の感謝すべきところ、假令恩を恩と當時は感ぜずとも、子を持つて知る親の恩、後日必ず覺るところあるに相違ないから、茲少し寛容を垂れられて、多少は『まあ年若い者であるから』といふ思ひ遣りを心に念とせらるゝことが出來たならば尚ほよろしからう。

其思ひ遣りも「わざとならぬ思ひやり」にせらるれば一入年若い者の仕合である。『秋茄子を嫁に食はすな』といふ諺がある。之は秋茄子には種が多くアクが強くて身の爲にならぬ殊に身ごもれる者が食べると其害が胎兒にまでも及ぶといふ心配から、眞殊に姑あたりが親切のあまり言ひのこしたものであるさうだが、同じ親切な思ひ遣りならば成るべく平等に思ひやることが肝腎で、嫁に毒なもののあらば他の家族にもまあ大抵は毒であらう。さるに殊に嫁のみに姑が親切であるのは何れ孫の可愛さもこもつて居ることとも思へるけれど、さりとは矢張り過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しである。之が爲に品性の修養の足りない仲間では、秋季には誰も食事が進む、殊に乳呑兒のある嫁などは自分で不思議なほども進む。ドンな材料でも小言がない、況して秋茄子の小さなのが食膳に上つては風味更に一段である。凡て味よいものをば憎い者には食べさせたくはない。嫁は元來憎いもの夫れ故に嫁には秋茄子を食はすなと姑達がいつたのだと誤解するものもある。斯いふ工合になることもあるから、年寄の親切な思遣りも、或程度までは家族の幼長の序によつて等差のあるのは至當のことではあるが、あまり一方に殊更に傾いたとにならぬやうにせらるゝならば元來親切からの世話が一入嫁に有難く感ぜらるゝであらう。

以上、年少者の心地よげなる從順、年長者のわざとならぬ同情、此二大要件を具した上に今一條件、即ち右の双方の中何れかゞ多少ドウあらうとも、其一方否自餘の一切に、之を調節して和平ならしむるが各自の責任であつて各自の幸福即我

一家の幸福であるといふタシナミが出來て居れば、茲に家庭は益桃源郷の本色を發揮するであらう。萬々一の場合に右の心懸を有する者が多人數の家庭内に唯一人であつても、其一人の始終徹らぬ心懸けには何時しか他の多數も醇化せらるゝものである。一家一人を以て起るといふ詞は千古不朽の格言である。天下の事と雖さうである。況んや文字通りの一家庭をや。

其三、僕婢の事、

少し人數が多くなるとドウしても僕婢を家庭に入れねばならぬことになる。此事は大したことでないやうで其實、一家の平和と幸福とに割合に大なる關係を有して居る。特に兒女の教養上に少からぬ影響を及ぼし或は卑陋下劣弊風に染み或は魯大倨傲の惡德を長せしむるなど甚だ面白からぬ結果を來たすことがある。

之が爲に雇傭の際の選擇が最も必要だと一般にいつて居るやうであるが、實際さう詳しい選擇の出來ない事情もあり、又ドウせ僕婢として働かむとする者などの大多數にさう立派なものがありさうにもない、稀に存する掘出し物に當つたら思の外の仕合ともいふべきものであらうから、選擇の標準は、大体眞面目で素直なものらしければそれ丈でもまあよからう。併し雇傭してから後に可なりに仕立てるつもりでかゝれば大底は用に立つものである。何は兎もあれ、既に家庭に入れた以上は、少くとも彼も人の子といふ同情を以て遇して、やりたいものである。出來得べくは殆んど家族と區別するところなく常に此僕此婢も已の子の家族だと思ひやつて世話してやる意氣がありたいものである。同情と意氣との前には鐵腸國士と雖尚ほ功名復た誰か論ぜんと出でくる。況んや單純なる僕婢をや。人を遇するに同情と意氣とを以てする美觀には、其家庭以外の傍觀者にさへ言ひ知れぬ愉快と賴母しげとを感ぜしめうるはしき趣味を涵養せらるゝものである。況して其家庭内の人々に於てをや。

以上のやうに根本的の要件から段々に具足して來れば、我邦の家庭のやうな多人數の家族のあるのは、親子長幼等の關係などを幼年者にそれとは

なしに心得しむる栞ともなつて一層趣味あることと思ふ。

其他の要件としては、家庭の事はドウしても大部分は主婦の技倆を要すること故、主婦に事務辨理の腕もはしく、特に經濟運用の胸もあつてはしい。が何より先は上來述べた氣立てであらう。

其四、家風の事

以上三項に述べ來つた根本的要件が具足して、それが引續いて實際に行はれて、何時しか一種の家風といふものになつて終へば、一層面白からうと思ふ。

第二節　飲食の事

元來健全な趣味涵養をなすには、何より先に、多少物心の出來た者以上の者共の、『世の中は自分の思ふ通りのみに行けるもの』とか、『面白いことのみあるもの』とかいふやうな稚氣を、根から拔いてしまうことにしなくては埒が明かぬと思ふ。

飲食に就いてもさうである。

由來、味には善惡がない、又美醜もない、唯、好き嫌ひ、風味不味などいふことはある。何物が斯く味に好惡を來たすかといふと、

第一、味覺に各自特殊性が先天的にあること。

例へば、甘黨、辛派、鹹口、淡口、酸好、脂好み、燒組、煮仲間、つくり連といふが如きそれである。而して味ひ慣れるにつれて、自づと敏く感覺するに至つて所謂酒キ、菓子キ、の如き顯著な差別作用を起すやうになる。

第二、味覺そのものが變化を好むものなること。即ち珍膳も毎日食へば味ならず、自分の家に買つた菓子も味よいが、思ひがけなくも遠方からの到來の些少のそれが一入味よく感ずることが多い。之も材料に存する味そのものよりも由來の變り製法のかはりなどより、我知らず味が左右せられて居るのである。

第三、消化力の如何に由來すること。即ち一般にいへば胃の腑の作用の達者なものは、その弱い者よりも、味よく感ずる場合が多く。又丈夫な胃の腑を備へて居る者共でも、室内に終日籠居する坐業家となると、内主の心盡しの膳部にさへ不感謝の色が動もすれば現は

れ、右向け左向け一二三四で朝夙くから元氣にやつて居る兵隊となつては引割の半麥飯の長持一棹を半粒も殘さずに平ぐるのを見ても、味が口中舌部で味はるゝとともながら其材料受取所の如何に左右せらるゝことがわかる。

第四、視覺嗅覺の助勢に左右せらるゝこと。即ち調理法、及び排列法などより來る材料の外形と色彩と香氣などに、著しく左右せられて居る。延いて材料を容るべき器、之を盛るべき具などの如何にも少からず左右せられて居る。

約めていへば、味は勿論味ふべきものに由るものながら、之を味わりとするは人の味覺であつて、而して其覺は如上の諸條件に支配せられて居るのである。從つて靜觀すれば、味なしといつて食物に小言をいふのは多くの場合一種の滑稽である。

年少の患者に心得させたい。長き年月の間には稀には健康を損することもあらう。極稀には不健康に始終する人もあらう。誰も自から好んで病む人はないこと故、此等患者の動もすれば、我知らず內心に不滿足を感ずることのあるのは無理もないことで寧ろ同情すべき點も少くないが、總じて患者が殊に飲食物に不味を感ずるは多くの場合に於て有り勝ちのことである。何時にても命數が盡くれば夫迄だと覺悟をして居りさへすれば、味位のことは、さう大した問題ではなからう。それをタシナマずに、調理の細事に渉り、器具の取扱の小節につけ、殊に材料の如何に關して、云々するやうでは、第一に夫れで折角の味ひを自分から打毀はして終うのである。凡人の人情殊に年若きものゝ常情とはいひながら、若し斯かる際にも自から心氣を調節する勇氣が平生の半分丈でもあるならば誠に自他を幸福ならしむること更に一段であるであらう。

年少の息災な者に心得させたい。何が味がよい、かゝ味がどうのといふことは、達者なものゝ口にすべき詞であるまい。

此世に客に來たと思へば何の苦もなし、朝夕の食事も旨からずとも褒めて食ふべし云々。

伊達政宗

隨分無理な註文のやうではあるが、味よく食べやうといふ心氣を据ゑよ、といふところ、流石に味がある。由來人間は食ふ爲に生れて生きて居るのでなくて、生きる爲に生れて食つて生きて居るのである。即ち飲食は目的に非ずして手段である。此要領をよく會得して念々之に常住する境に達すれば、茲に漸次に、食疎食、飲水、曲肱而眠、樂在其中、といふ趣味をさへ解することが出來るのである。幸にして此境に入れば、一片の肉一杯の茶、尙ほ暢然として大牢の滋味あるを感ずるであらう。

斯心を以て食膳に對せば、何れの時、何れをとるとも可ならざることやある。殊に晩餐は何れの家庭にありても最も趣味ある機會であるであらう。內では心をこめたる準備して待つて居る、外からは劇務から凱旋して來る。茲に隔意なく團欒して食卓を圍むことが、其各員に更に捲土重來の元氣を涵養すること蓋し百萬の援兵にも超越するものあるであらう。斯くて罪なき談笑も始まり無邪氣な腕白も稀には演ぜられて一家何時しか笑ひの樂園に化することもあらう。その上に珍膳嘉肴があらば尙ほわるくないまでのことである。

余が知人なる某ドクトルは日日多忙を極めて居るが、一週に一回丈は必ず家族一同の晩餐會を開くことに定めて、其夕には令夫人が先鋒で主人ドクトル兩親兒女などが中軍で、書生小間使別當炊婦に至るまで皆相率ゐて後衞として參加し、以て一大圓陣をつくつて、一切平等怡々洋々として暢神歡娛する仕組にやつて居る。親友の飛び入りなどは大に歡迎するところであるさうである。斯いふやうなことも面白からうと思へる。（つゞく）

▲海洋消滅の期　地球は次第に乾燥して終に海なきものとなるべしとは星學者間に於て一般に信ぜられ居る說なるが有名なるローウエル教授は此程センチユリー雜誌に於て此事を論じて曰く從來火星の表面に海ありと信ぜられたるは誤謬にして火星には最早海なく地球も幾千万年の後には火星の如くなるべし此事は往時線樹繁茂して美麗なる都會を爲したるパレスタイン及びカーセージ等の土地が今や砂漠に化したるを見ても明かなり但し火星の狀態に在る間は尙人類の生存に適し月世界の如くなるに及んで始めて人類滅亡するものなりと